

グローバルハイスクール

県都「静岡市」における社会的な課題について海外高校生と協働し
取り組むことを通して、国際的な役割を担う人材を育成する
(静岡県立静岡城北高等学校)



1 グローバル教育の概要

本校は、グローバル科併置のメリットを生かし、広い視野で地域の課題を発見・解決する探究活動を通して、将来の Shizuoka を支え、行動する人材を育成するため、学校全体でグローバル教育を推進している。グローバル科では、『『グローバル課題探究』を軸とした3年間のシラバス』に基づき教育活動を展開し、海外の高校生や留学生の視点を取り入れた探究活動と、その集大成である海外異文化体験の充実・改善に力を入れている。また、令和5年度に第2学年を中心に行った民間のオンライン英会話を活用した外国人講師との英語相互交流授業の成果と課題を踏まえ、令和6年度からは全校実施を開始した。全生徒の英語コミュニケーション能力の向上につながることを期待する。

2 実施計画と具体的内容

- (1) 探究を軸としたグローバル科海外異文化体験プログラムの改善
 - ①系統的・循環的な「グローバル課題探究」 ②海外異文化体験
- (2) オンラインによる外国人講師との英語相互交流授業に関する実証研究
 - ①民間のオンライン英会話を活用した探究的な授業の実践 ②英語力の測定
- (3) 探究を軸とした全校体制のグローバル教育システムの構築
グローバル科の活動の普通科への波及



3 令和6年度における取組

- (1) 探究を軸としたグローバル科海外異文化体験プログラムの構築(充実・改善)
 - ①系統的・循環的な「グローバル課題探究」(グローバル科1～3年生)
 - ア グローバル科縦割り授業(通年)
科内の交流、探究活動の共有、先輩から後輩への助言など
 - イ 静岡大学留学生との相互交流
5/10 留学生来校(グローバル科2年生) 12/13 静岡大学訪問(グローバル科1年生)
 - ウ サマーセミナー(8/6～8)
県内のALT7人と3日間の英語研修(グローバル科1年生)
 - エ グローバルな交流(グローバルな舞台で活躍している社会人との交流)
6/14 山口佳奈子氏(デロイトトーマツコンサルティング勤務)「コンサルティングの知見に基づいた問題解決のプロセスの体験」
11/1 井島知哉氏(三井物産勤務)「身近な社会問題に関するワークショップ」
1/10 白畑知彦氏(静岡大学名誉教授)「第二言語習得研究の魅力について」
 - オ グローバル社会見学(1/23～24)
東京学芸大学附属国際中等教育学校、神田外語大学、合同会社DMM訪問(グローバル科1年生)
 - カ 留学生の受入れ(9月～11月インドネシア、9月～翌7月台湾)
 - ②海外異文化体験(11/30～12/8)(グローバル科2年生)
カリフォルニア州立ロスアラミトス高校でのプレゼンテーション・授業参加、ホームステイ



(2) オンラインによる外国人講師との英語相互交流授業の導入と実証研究

①民間のオンライン英会話の英語授業での活用

令和5年度は第2学年の全生徒を対象に、令和6年度は全校生徒を対象に、カリキュラム上の英語授業にオンラインによる外国人講師との相互交流を導入した。学習指導要領に基づき、教科書の内容に関する「探究的な問い」について、生徒一人ひとりがそれぞれの英語力や価値観に応じて個別に外国人講師と考えを深め合い、そこでの学びをクラスで共有し、新たな問いに向かうというサイクルを基本とした。年間20回実施した。

②英語力の測定

生徒同士による対話よりもオンラインによる外国人講師との対話を通して、生徒の英語を聞く能力が向上することがわかった。外国人講師から与えられる言語的な修正フィードバックが質・量ともに豊かであることがこの結果の要因として考えられる。現在、英語を話す能力の分析を行っている。

(3) 探究を軸とした全校体制のグローバル教育システムの構築

- ①1・2年生校内探究活動発表会(1/29) ②英検面接ボランティアの生徒による面接練習(年10回) ③グローバル係による学校HPでの情報発信



4 研究の成果と課題

令和5年度、4年ぶりに海外研修を再開し、カリフォルニア州立ロスアラミトス高校との相互訪問を行った。対面交流が生徒の成長に及ぼす影響の大きさを再認識した。また、探究サイクルにおける海外研修の位置付けや実施内容についての課題を見出した。さらに、本校を会場に日本文化を学ぶ米国民生徒と普通科の1・2年生の全生徒が交流できたことは、普通科のグローバル教育推進に大きな意義があった。

令和5年度の海外研修では、生徒がそれぞれの探究発表を現地の高校生の前で英語で行った。大変チャレンジングな取組であり、それぞれの生徒が得られたものは大きかった。一方、生徒・教員双方にとって負担が極めて大きく、準備不足の生徒は十分な成果を得られなかったことが課題となった。このことを踏まえ、令和6年度は、「持続可能な海外研修」をテーマに内容を改善した。生徒を複数のグループに分け、日本や静岡の文化を探究し紹介する内容に変更した。これにより、聴衆である現地高校生の興味をより喚起し、エンゲージメントを高められただけでなく、本校生徒が協働する力を高めることもできた。グローバルハイスクール事業があったからこそ、本校は2年連続で海外研修を実施できた。本校の目指す探究ベースの海外研修の方向性を探り、現時点での最適解を得られたことに大変感謝している。

コロナウイルス感染症拡大の「silver lining」とも言える「一人一台端末」を活用したオンラインによる「個別最適な学び」の具現として、英語授業にオンライン英会話を導入した。学習指導要領に基づき、教科書の内容に関する探究的な問いを設定し、生徒は外国人講師と議論を重ねた。本校外国語科にはこの取組に関する指導のノウハウが蓄積されてきている。生徒の英語力については、生徒同士の対話と比較して、リスニング能力の向上に肯定的な影響を及ぼすことが統計的に認められた。現在、スピーキング能力の伸長について検証している。

日本人の英語力向上は、グローバル市場が拡大する中で喫緊の課題である。日本人生徒同士が疑似的に英語で対話を行うことに加え、比較的安価に外国人講師との交流する環境を実現できるこの取り組みの成果について、検証を続けることに価値があると考え。来年度以降もオンライン英会話の授業での活用について研究を継続し、効果的な授業モデルの構築を目指したい。



1 グローバル教育の概要

本校は、地域社会等から、地域に根差して国際社会で活躍するグローバルリーダーとして将来の国家・社会を担い人類の発展に貢献する人材の育成を要請されている。特に、大学等に進学後、あるいは地域外で就業後に出身地域にUターンするなどして、それまでのキャリアを生かして地域社会の発展を推進する人材の育成が求められている。生徒が自ら地域課題等を設定し、その解決を図るための方法を考えるとともに、課題を解決するための資質、能力を向上させることを目標として、海外での実地研修や国内での大学等との連携等の在り方について研究し、実践する。

2 目標及び方法

(1) 地域の現状を知り、地域の課題を認識するとともに生徒が自ら地域への関わり方について考察することを通して、課題の解決に主体的に取り組もうとする態度等を育てる方策を試行し、検証する。

○地域学習（《1年》校外学習、《1年理数科》地球科学研修、《2年文系探究コース》伊豆半島研修）

(2) 国内外での実地研修や大学等外部機関との連携を通して、地域課題等を解決するために必要な資質、能力を向上させる方策を実践し、検証していく。 ※（ ）内は連携機関

○イギリス研修（国際教育文化交流協会） ○English browsing room

○《2年理数科》アメリカ海外研修旅行（Polytechnic School）

○《2年文系探究コース》シンガポール等海外研修旅行 ○オンライン英会話（静岡県立大学）

○サイエンスダイアログ（日本学術振興会） ○グローバル・スタディーズ・プログラム（ISA）

○アメリカ現地校との交流（Polytechnic School）

3 実施内容

(1) 地域学習

ア 校外学習《第1学年》

本校入学直後、1年生全員で本校周辺の史跡等を周遊し、本校が所在する地域について学習する。コースは、韮山城址→江川邸（国重要文化財）→本立寺（学祖：江川坦庵公、開設者：柏木忠俊公墓墓所）→韮山反射炉（世界文化遺産）→願成就院（国宝仏像安置）をホームルーム単位で分散して訪問する。

イ 地球科学研修《1年理数科》

在住する伊豆半島の地質について、専門家による講義とフィールドワークにより知識を深めるとともに、地質学的、生物学的見地から伊豆半島の成り立ちについて考察する。

ウ 伊豆半島研修《2年文系探究コース》

在住する伊豆、駿東地域について、地域の実情や地域資源を知り、問題点を考えるとともに、地域を活性化するための方策等を考察し、提言する力を身に付ける。



校外学習



地球科学研修



伊豆半島研修

(2) 国内外での実地研修、外部機関との連携

ア イギリス研修

夏季休業中の10日間、1、2年生の希望者40人がイギリス・ボーンマス市の語学学校で語学研修を受け、ホームステイを体験した。2年間で約80人が参加した。

イ アメリカ海外研修旅行

11月の6日間、2年生理数科生徒がアメリカ・ロサンゼルスを訪れ、最先端の科学技術を見聞するとともに、現地の高校生と交流しホームステイを体験した。2年間で約80人が参加した。

ウ シンガポール等海外研修旅行

11月の5日間、2年生文系探究コース約70人がシンガポール等を訪問、異文化体験を行った。



エ オンライン英会話

静岡県立大学言語コミュニケーション研究センターの外国人教員とオンラインで結び、英会話のトレーニングを実施。週2回×10週を前、後期の2期実施。2年間で56人が取り組んだ。

オ サイエンスダイアログ

日本学術振興会を通して派遣された大学の外国人研究者による英語での講義。理系、文系をそれぞれ1回、計年2回実施。2年間で約180人が参加した。

カ グローバル・スタディーズ・プログラム

ISAによるプログラム。夏季休業中の5日間、他校生とともに外国人留学生とワークショップを行い、外国人とのコミュニケーション能力の向上を図った。2年間で20人が参加した。

キ English browsing roomの開設

英文の書籍や視聴覚資料を配備。生徒が一人一台端末等を使って視聴できるようにした。

ク アメリカ現地校との交流

理数科海外研修旅行で訪問するロサンゼルス近郊パサディナ市の Polytechnic School との交流。今年度、教員2人が来校し、来年度の本校訪問や姉妹校提携について協議した。



4 成果と課題

(1) 成果

- ・生徒の海外渡航ニーズに対応、コミュニケーションの機会が増え、英語学習、異文化体験への意欲を喚起することができた。
- ・探究活動を行う上での参考となり、その充実に生かすことができた。

(2) 課題

- ・海外での実地研修は、景気の動向、為替相場等の影響により家計の負担が大きくなった。
- ・希望する生徒、理数科や文系探究コースの生徒に限定され、全校生徒に対応できなかった。
- ・海外研修旅行等の体験や学習成果を地域課題の解決と直結させるプログラムの工夫が必要である。

グローバルハイスクール

テーマ：地域に根差した国際交流の推進

静岡県立富士宮東高等学校



1 グローバル教育の概要

誰もが住みやすい地域（富士宮市）を創る人材を育てるため、地域に根ざした国際交流の推進として、友好都市である台南市の市立永仁高級中學校と互いの地域の魅力への理解を深める交流を行い、友好都市のこれからの絆を強める。また、多様性を享受する心を育むため、地域に住む外国にルーツを持つ人々と共に学ぶ共生共育を通して、その人々が地域で暮らす中で抱える課題を共有し、課題解決への道を探究する。

2 実施計画と具体的内容

- (1) ACC 国際交流学園の学生や地域で働く外国人と料理教室や部活動参加を通して交流を深める。
- (2) 台南市の高校との交流を通して海外への興味を広げ、修学旅行海外コースへの参加希望者 50 名以上とする。また、永仁高級中學校とのオンラインや対面での交流を継続したり、外国ルーツ生徒の校内発表や、生徒が様々な制度を利用して海外渡航経験を積むことで、生徒の海外への興味を広げる。
- (3) 民間試験（実用英語技能検定を予定）を活用し、英語力向上へのモチベーションと総合力を測る。指標として、受検者数の増加率と合格者数を用いる。受検者数前年比 120%、受検級合格率 70%、準 2 級以上の合格者 15%以上を目標とする。

3 各年度における取組

令和 5 年度

通年 ・ オンライン英会話実施（1 年生） 「論理表現」の授業で、月に 2 回程度、英会話実施

・ ACC 国際交流学園学生との交流

International cooking day （5 回）

部活動交流（弓道・茶道・華道・情報処理・バドミントン・バレーボール）

随時 ・ 6 月 留学生、外国にルーツを持つ生徒が文化祭で体験発表（ドイツ、ボリビア、パキスタン）

・ 12 月 海外研修（台湾）生徒 8 人派遣、台南市の永仁高級中学校生徒と交流

・ 2 月 富士宮市国際交流フェスティバル参加

令和 6 年度

- 通年 ・ オンライン英会話実施 全学年の論理表現の授業で、年間 22 回、フィリピンの方と英会話
- ・ ACC 国際交流学園学生との交流

International cooking day (6 回)、部活動交流 (生活科学・茶道・華道)

- 随時 ・ 5 月 外国にルーツを持つ生徒が文化祭で体験発表 (中国)
- ・ 8 月 ドイツ人スポーツ少年団受け入れ

生徒と昼食の調理、黒板アート体験、ディスカッション等で交流

- ・ 8 月 ACC 国際交流学園文化祭で書道部が書道パフォーマンス披露
- ・ 10 月 ブラジル人短期留学生受け入れ (10 月 15 日から 11 月 9 日)
- ・ 10 月 富士宮市台南紹介イベント参加 (台南研修報告実施)
- ・ 2 月 富士宮市国際交流フェスティバル参加
- ・ 11 月 ドリームプロジェクトでパレスチナ人を招聘、交流
- ・ 11 月 修学旅行 コース別修学旅行で台湾訪問 (20 人)
- ・ 12 月 海外研修 (台湾) 生徒 7 人派遣

富士宮市と友好関係都市である、台南市の永仁高級中学校生徒と交流

- ・ 海外体験又は交流体験発表 (ドイツ、シンガポール、モンゴル、台湾)

4 研究の成果と課題

オンライン英会話の実施は、生徒が英語を話すことへの抵抗感を低くして、海外ルーツの方と交流する様々な機会に参加する意欲を高めた。令和 6 年度には、「ふじのくにグローバル人材育成事業」等への応募を 5 件行い、2 名がそれぞれシンガポールへの短期留学、モンゴルへの高校生相互交流事業に参加した。個人でイギリスに語学留学した生徒もいた。

実用英語技能検定の受検者は、令和 6 年度はグローバルハイスクール事業実施前の令和 4 年度と比して、受検者数で約 1.5 倍であった。対して、受検級合格率は令和 6 年度 34%と、令和 4 年 (48%) に比して減少している。交流に対するハードルは低くなったが、英語の実力に結びつかなかったことが成果でもあり、課題でもある。

台南市立永仁高級中学校生徒や ACC 国際交流学園の学生との交流は、共通の活動を通して相互理解を深めることにつながっている。オンライン交流、部活動交流など様々な形で、地域に根差した国際交流を継続していく。

グローバルハイスクール

テーマ：吉高 Spirit を持って未来を切り拓くための5つの力の育成～グローバルに生きる人間性を高める、グローバルな活動の構築～
(学校名) 県立吉原高等学校



1 グローバル教育の概要

国際科を中心としながら異文化体験、異文化理解、国際交流を通じて多様性を身につけるとともに、異文化体験報告会を通じて普通科の生徒へも理解を広げています。また、オンライン交流や台湾姉妹校交流に普通科の生徒が参加し、学校全体へグローバル教育を浸透させています。

2 実施計画と具体的内容

実施計画	具体的内容
海外体験	国際科海外異文化体験
	台湾姉妹校交流馬公高級中学訪問
	モンゴル国・ドルノゴビ県高校生相互交流事業参加
国内（校内）における活動 （国際理解、異文化理解、留学生との交流、語学学習）	オンライン交流、異文化体験発表会、留学生受入 サマーセミナー、ウインターイングリッシュキャンプ
	国際理解講座（本校生徒）
	国際理解公開講座（地域中学生及び高校生参加） （日本語学校留学生、静岡大学留学生、地域の外国人との交流）
	フェアトレード講座、浴衣着付け講座、
生徒の主体的な活動	外国人生徒学習支援ボランティア

3 各年度における取組

○国際科海外異文化体験（令和6年11月28日～12月7日）

令和6年度はマレーシア、シンガポールにおいて、ホームビジット、産業見学、体験学習、文化交流、大学訪問等を実施。着付け講座で教わった浴衣を着て街に出ると現地の方からたくさん話しかけられました。大学訪問では講義を受け、マレーシアについて学びました。



○台湾姉妹校交流馬公高級中学訪問（令和6年12月25日～28日）

今年度は普通科の生徒も含めて10人の生徒が参加。ホームステイと学校による授業、部活動への参加。そして馬公高級中学の生徒と一緒に市内散策と、異文化の体験と同世代の交流をはかりました。短い期間ではありましたが、別れがとても辛くなるほど充実した交流でした。



○国際理解講座（令和6年8月27日、12月22日）

講師に、はままつ国際理解教育ネットの中澤純一氏と小林祐樹氏を迎え国際理解についての講義を受けた後、日本語学校への留学生、静岡大学の留学生と交流をはかりました。2回目は公開講座とし、地域中学生、高校生も参加しました。本校生徒が日頃の成果を発揮しリードしました。



○異文化体験発表会（令和6年10月23日、3学期にも開催予定）

留学や国際科海外異文化体験など海外を経験した生徒による体験談を通して、全生徒への異文化理解、国際理解の促進をはかっています。本校への留学生からの発表もありました。



4 研究の成果と課題

オンライン交流、サマーセミナー、国際理解講座など校内で実施する交流と、実際に海外へ出ること、生徒の国際理解、異文化との交流に対する興味関心も高まっている。海外交流を今後も継続させたいが、海外に出る費用が高騰しており、姉妹校交流等の参加者に対して、補助、支援がないと、行きたい気持ちはあっても断念せざるを得ない生徒が出る懸念がある。

グローバルハイスクール

テーマ：グローバルな視野と進取の気性を育み、異文化を理解する心を涵養し、外国人との共生など持続可能な社会に生きる力を身に付け、地域に貢献する人材育成の在り方について探る

静岡県立榛原高等学校



1 グローバル教育の概要

本校では、文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」を令和元年度から3年間、静岡県の「オンリーワン・ハイスクール（グローバル・ハイスクール）」を令和3年度から3年間それぞれ指定を受け、この関連事業を「HAFプロジェクト」（HAIBARA ACHIEVING FUTURES PROJECT）と名付け、「地域と世界を結ぶ有為な人材育成の望ましい在り方についての研究」という副題をつけて取り組んできた。コロナ禍で中止していたグローバルな研修の再開やより改善・深化したHAFプロジェクトを継続的に推進し、「地域と連携した教育活動を通して、地域についての認識を深め、グローバルな視野を併せ持つ生徒の育成」「地域と連携した教育活動を通して、自ら課題を設定し、他者と協働してよりよい解決に向け主体的に判断し、表現する力を身に付ける生徒の育成」を目指す。

2 実施計画と具体的内容

- 1) 実社会とのつながりを考え、地元企業の地域貢献やグローバル展開を知る（企業訪問）
- 2) グローバルの知識・理解を得て、考察・探究する態度を身に付ける（海外研修・オンライン交流）
- 3) 英語によるコミュニケーション力を育てる（イングリッシュキャンプ、英検取得推進）
- 4) 地域の人と協働、地域貢献する態度の育成（地域リーダー育成プロジェクト（牧之原市事業）への参画）
- 5) グローカル部による地域・国際的課題の解決策の探究、実践活動

3 各年度における取組

- 1) 企業訪問
 - ・普通科2年選択科目「発展地域創造探究」の選択生徒を中心に、矢崎総業株式会社Y-CITY（裾野）を訪問し、企業の地域貢献やグローバル展開について学んだ。（2年希望者18人参加）
 - ・海外研修（ベトナム）において、地元企業の海外事業所（矢崎ハイフォンベトナム有限責任会社）を訪問した。（1、2年生希望者26人参加）

2) 海外研修・オンライン海外交流

(1) 海外研修

「地域経済社会と諸外国が密接に関係していることを理解するとともに、グローバルな視野と国際感覚の醸成を図る。」を目的に2019年度の台湾研修以来の海外研修（ベトナム）を実施した。

日程：2024年12月21日（土）～25日（水） 参加者：1、2年生希望者26人、引率教員3人

12/21(土)	学校出発 13:00、中部国際空港見学	常滑市泊
12/22(日)	中部国際空港→ハノイ空港、ハノイ旧市街散策、スーパー買い物体験	ハノイ市泊
12/23(月)	ホーチミン廟など観光、矢崎ハイフォン・ベトナム有限責任会社訪問	ハロン市泊
12/24(火)	ハロン大学日本語を学ぶ学生との交流、世界遺産ハロン湾クルーズ	機内泊
12/25(水)	ハノイ空港→中部国際空港、午前学校着	

(2) オンライン海外交流

- ・グローバル部（最大 32 人）：昨年度から継続して、台湾の「国立金門高級中学」と交流した。2、3 人のグループ対グループまたは 1 対 1 の英語を使った交流やクリスマスカードを送りあったほか、複数の SDGs の目標をテーマにディスカッションするなど交流を深めることができた。
- ・発展地域創造探究選択生徒（18 人）：台湾の「高雄市立高雄女子高級中学」との交流。（2 月に実施予定）
- ・普通科 1 年生：ベトナム、フィリピン、インドネシアの生徒と言語スキルの向上と文化交流を目的に、オンライン交流会を行った。

3) イングリッシュキャンプ・英検取得促進

夏季休業中に、英語の言語活動を充実させ、異文化理解、コミュニケーションスキルの向上を図るとともに、英語の 4 技能の習得や表現力を身に付けることを目的に、普通科 49 人、理数科 2 年 29 人の生徒を対象に実施した。



4) 地域リーダー育成プロジェクト（牧之原市事業（主催：牧之原市地域振興課、一般社団法人 C L I P））

多様な大人との対話を通して、地域のリーダーとなる資質・能力を育成することを目的とした連続講座「地域リーダー育成プロジェクト」（対話の場・計 4 回、ファシリテーション研修 1 回）に、延べ 103 人、実人数 61 人の生徒が参加した。そのうち 5 人は運営スタッフとして、各回の運営にあたり、特に「話し&聞き上手になろう」の回では、企画等で活躍した。

5) グローカル部の活動（台湾オンライン交流以外のグローバルな活動）

「吉田町はじめてのにはんご教室」のサポーター養成講座及び教室に、延べ 5 回、1 年生 10 人が参加したほか、矢崎部品ものづくりセンター地域感謝祭ボランティア、御前崎市でのサーフィン国際大会の併設イベント実施など、地域と協働した活動を行った。

4 研究の成果と課題

- ・昨年度よりもイングリッシュキャンプやオンライン交流などへの参加者が多く、充実した活動ができた。来年度、理数科のイングリッシュキャンプは「Touch up English」と名前を変え、海外修学旅行に向けたプログラムを充実させる。普通科 1 年生は引き続き英語に慣れ親しみ、英語によるコミュニケーションスキルの向上を図ること、上級生はグローバルな社会課題に対して自分の意見を理論的に伝えるスキルの向上を図ることを目的に実施する予定である。
- ・2019 年度を最後に中止していた海外（ベトナム）研修については、参加希望も多く、地元企業の海外事業所訪問、日本に関心を持つ大学生との交流など、学校でなければならない活動に対する生徒、保護者の満足度が高かった。ただ、実施時期や費用について、また生徒の探究活動をより充実させるための事前、事後研修の在り方などについては今後も検討したい。
- ・事業全般について、異文化を理解する心、外国人との共生など持続可能な社会に生きる力等を生徒自身が意識し、より生徒のキャリア形成に結び付く活動にしていきたい。



グローバルハイスクール

テーマ：内向き志向が強く地域課題に対しては誠実に取り組む本校生徒が、外を向き「グローバルな視野」を身に付けようとするにはどのような働きかけが有効か。
(静岡県立浜北西高等学校)



1 グローバル教育の概要

本校では「グローバル教育」を「国際理解教育」と言い換え、特色ある教育活動の一つとして推進してきた。スクールミッションに「キャリア教育に国際理解教育、地域連携・協働活動などを取り入れた探究的な活動を通して、グローバルな視野で、将来、地域社会（ローカル）で活躍できる能力と態度を備えた人材の育成を目指す」と謳っているが、内向き志向が強く、加えて英語を苦手と感じる生徒も多く、真の「グローバルな視野」の獲得には課題がある。

これまでも地域の「浜北国際交流協会」と様々な形で交流を続け、タイ王国シリントン高校生徒の受け入れ、文化交流授業の実施、国際協力に関するレポート作成などを行ってきた。また校内では生徒委員会の一つとして「国際交流委員会」を設け、オンラインで海外生徒と交流するなど、外を向くきっかけとなるよう働きかけてきた。さらに他国より留学の希望がある場合には積極的に受け入れ、国際交流の場を増やし「グローバルな視野」を持つ機会が増えるよう努めてきたが、コロナ禍のなかで中学校生活を過ごしたことも影響するのか、留学希望はなく、進路先では多くの生徒が県内、あるいは県外であっても近隣の愛知県を選ぶ生徒がほとんどで、地元志向が極めて強く、結果として語学学習の意欲も乏しい状況である。（「家庭学習をきちんと取り組んで授業に臨んでいる」と答える生徒の割合は、英語が5教科の中で最も低かった。R6 12月の授業評価アンケートより）

今回「グローバル・ハイスクール」に採択されたことを踏まえ、スクールミッションである「探究的な活動を通して、グローバルな視野で、将来、地域社会（ローカル）で活躍できる能力と態度を備えた人材の育成」の高いレベルでの実現のため三つの方向から「グローバル教育」の深化を図った。まず第一の方向は「『探究』×『グローバル教育』」の視点からの取り組みである。本校の探究学習は1年生で「地域課題」、2年生で「SDGs」、3年生で「自己」をテーマとしているが、探究学習をより充実させ、「地域課題」をさらに深く掘り下げていけば自ずからSDGsを含めて世界が直面する課題に視線が向くはずと考えた。第二に「体験」の視点からの取り組みである。内向き志向の強い生徒たちに、より多くの海外の人との交流「体験」、海外の文化の「体験」をさせることで、生徒の視野を地域だけでなく世界に広げるきっかけになり語学学習の意欲も増すことが期待できると考えた。第三に校内の「環境」づくりの視点からの取り組みである。LL教室を「グローバル探究ルーム（仮称）」に模様替えする中で、Wi-Fi環境を整え、海外の書物、映画のDVDなどを揃え、英語を苦手とする生徒が語学学習に関心をもち、探究学習で培った知見を海外の生徒とオンラインで意見交換したいという希望が多く出てくることを期待しての取り組みである。

以上、本校がこれまでに取り組んできた「グローバル教育（国際理解教育）」と「グローバル・ハイスクール」に採択され新たな取り組みを加えた「グローバル教育」の概要である。

2 実施計画と具体的内容

（1）『探究』×『グローバル教育』

① 講師招請 ② 連携大学（常葉大学）での探究学習発表 ③ 先進校視察

（2）グローバルな「体験」

① 連携校であるタイ国シリントン高校交流（受け入れ） 令和6年6月 令和7年6月（予定）

② アジアの架け橋 フィリピン留学生受け入れ 令和6年9月から12月

③ タイ国シリントン高校訪問 令和7年8月（予定）

(3)「環境」づくり

① 「グローバル探究ルーム（仮称）」創設

3 各年度における取組

(1)『探究』×『グローバル教育』

① 10月9日（水） 先進校視察 東京佼成学園高等学校 教員2名

② 10月22日（火） 「探究の日」 講師（18人）招請



③ 2月22日（土）～23日（日）日本ソーシャルデータサイエンス学会発表会 於 新潟

(2) グローバルな「体験」

① 6月3日（月）～6月8日（土） タイ国シリントン生徒11名 受け入れ

「海外からの留学生と会話したり一緒に行動したりすることは初めてだったが、英語をもっと勉強したいと思うきっかけになった」（本校生徒の感想）



② 9月2日（月）～12月13日（金） フィリピン留学生（アジアの架け橋事業）1名 受け入れ

「外国の学校に通うことは決して簡単ではないが、出会ったすべての人のおかげで、温かく迎え入れられた。言葉の壁はあったが、多くの大切な友人ができた。」（留学生本人の感想）



③ 12月23日（月） グローバル研修 生徒51名参加

静岡県立大学国際文化学科では現役大学生による大学での学びや大学生活について、熱海市役所では観光やインバウンドの取組について、それぞれ話を伺い、興味関心を高めた。



(3)「環境」づくり

① 旧LL教室（グローバル探究ルーム（仮称）」 関連図書購入 オンライン用備品購入

4 研究の成果と課題

「体験」のたびに生徒の意欲の高まりを実感し、短期留学を希望する生徒数、英語検定を受験する生徒数は増加している。一部の生徒だけでなく全体に広げ、英語学習への意欲を高めることが課題である。